

# 日本生物学会誌

第 34 号



日本生物学会

1993年 10月31日

も く じ

半仙半魚：私のきれいなもの（人）その1	1317
奥野良之助：『助教授』考――筋違いの恩師・ 故徳田御稔助教授のこと	1320
椿 二十郎：ばーかもん	1340
関西支部結成のお知らせ	1343
通告書	1344
日本生物学会関西支部 旗揚げ!!!	1345
編集局だより	1354

## 私のきらいなもの（人）その1

### 半 仙 半 魚

当学会の本部がある金沢大学も、私の仕事場と変らないくらい不便な山手に引越した。私の仕事場へ行く途中の浅ノ川という川を渡って行くのである。昔から、浅ノ川を渡ってしまえばロクなものがないと言われてきた所だ。刑務所に、ゴミ捨て場に、精神病院（差別用語！）、それに金沢大学が加わったのである。《「差別用語だ！」――金沢大学学長》

そんな事はどうでもいいのだが、引越したという連絡が入ってきたので、さっそく友人とロクなものでない所へ行く事にした。唯一の取り柄であった城の中の大学とは大違いである。周りには何も無い。駐車場といわれる所に車を止めても、かなり歩かなくてはならない。それでも、そこから理学部をながめれば、新しい建物、周りの芝生、もともとやる気のない者でも、新しいとそれなりに何かいい事がありそうな気分になれるのだろう。《そんな気分には到底なれんね。みんなぶつぶつ言ってるよ――会長》

そんな事を考えながら、芝生の中を近道して歩いて行った。頭の上の方で構内放送が何か言っている。正面より中に入ると、どこかの怖そうなおじさんが、目の前に立ちふさがっている。「今構内放送で注意したやろ。芝生には入らんでくれ！」、っばなから「これ」である。昔、大学生一日目の入学式にゲタバキで臨んで、「タバキ禁止」と言われ、素足で入学式に出た事を思い出した。また、学生の頃沖繩へ行った時（当時はまだアメリカの領土だった）、外国人専用のゴルフ場で昼寝をしていたら、数人の男（日本人）に囲まれ、やはり「芝生がいたむ。出ていけ」と、けんもほろろに追い出された事がある。そいつらが見えなくなったので、もどてそこで（ウンコ）でもしてやろうと思ったが、出ないので（しょうべん）でがまんして逃げてきた事があった。私の子供の頃は、麦と芝生は踏みつけるものだと思っていたが、この頃の芝は上品にできていいらしい。《この頃の「学生」も上品にできてるよ。うっかり踏みつけたら、すぐだめになってしまう。君らの頃は、「教官」を踏みつけたのにね――会長》

理学部の建物の中は、廊下は狭く、薄暗く、会長の室を捜して歩くうちに、病院の入院患者の室を捜しているような気分になる。70年代に（市民に開かれた大学、市民のための大学）とか、カッコのいい言葉をよく耳にしたが、一般市民の目のとどかない所までくれば、余計に大学のありがたみが増すのかもしれない。

ところで会長の方は、自然が少々残っているだけ取り柄で、「そんな所はきらいじゃ」と言っていたので、さぞ落胆しているのでは、と思っていたら、《「期待していたら」の書き間違い――会長》 相変わらず、ドアを開けると、ガチャ、ガ

チャとタイプを打つ音がする。《今はワープロだよーんー会長》そして私の顔を見るや、「新しい生物学会誌ができて」と、ドサッと渡してくれる。実は私の方は、もうそろそろ生物学会誌の書き手がおらんから終りにしようと言われるのでは、と心配してきたのに、このオジサンは書き手が自分一人になってもやるつもりらしい。

さらに思い出したのだが、以前胃を切り取って入院した機会に《「胃を切り取って」から入院したわけやないで。入院してから胃を切り取ったんやぞー会長》本を書いた前歴があり、《入院中に書いたわけやない。入院中に書いたのは、「教授批判文書」だけやー会長》周りの環境が悪くなればなるほど、ガンバルタイプなのかもしれない。この辺が、国家権力を信用しない戦中派のすごい所なのかもしれない。

それに先日、会長の本を読んで感激したという若い女性（高校生）と文通しているとの事。私も以前、地方誌に訳もわからん事をしばらく書いていた事があったが、その時、ひょっとしたら若い女性から「おもしろかった」と言ってくるのでは、とバカな期待をした事があったが、結局「おもしろかった」と言ってきたのが、自称「内灘のヤクザ」だけだった。（それが縁で、今もつき合っている）

それ故、もの書きで若い女性から反応があるという事は、いかにはげましになるかはよくわかる。ただ、大学教官、しかもそれなりの齢になると、体面上ストレートには喜んだりしないものだが、当会長はいかにもウレシソウに、「動機が不純だからいいのや」とケロツとしている。《「動機が不純や」言うたのはお前やないか。まあ、同意はしたけどなー会長》もっとも、名誉とか、金もうけでしかやっていないくせに、いかにも意味ありげに言うのが大学教官だから、今回の件は、私（学会風紀委員）としては責任を追求しない事にした。《そんなもん、任命した覚えはないぞ。だが、もしF女史なんか風紀委員されたら大変やから、やっぱり君にしとくかー会長》

それにしても、その高校生の親は、金沢大学という所はいったいどんな所だろう、娘を進学させるとしても、金沢大学だけはやめようと思っているのではないだろうか。

会長の元気な姿を見て、最後に、「お前も何か書け。ヒマはあるやろう」「ヒマはあるけど、別にたいくつしている訳ではない」「お前はたいくつに強い男やからな」とほめられ、室を出た。しかし、会長の「たいくつに強い」という言葉が気にかかる。「ほめ言葉？」いや、すなおにほめる人ではない。（たいくつに強い=たいくつしても何も感じない→ボケ）そうや、山奥にいて頭を使わないとボケてくる、という意味ではないだろうか。だからそうならないように「お前も何か書け」という事だろう。《「ご正解！」といたいところやけど、正真正銘君のたいくつへの抵抗力には感心している。これだけは真似できんなー会長》

私も前々から、書きたいテーマ（テーマというほど大げさなものではないが）が

あった。それは、今「世の中でいないもの」であった。例えば「大学」。しかしペン（ボールペン）を取って書きはじめてすぐ気がついた。いや、だれかの声があった。「いないもの＝お前・お前の仕事・生物学会」《生物学会まで入れるな！――会長》 これらにはたしてちゃんと反論できるだろうか。先日釣りに行って、魚が陸にいっぱい捨ててあった。捨てたと思われる人に、私、「捨てるくらいなら逃がしてやったら」「こんな魚はいらん魚や」と釣り人。「平日の昼間から釣りをやっているテメエも、世の中にはいらんもんや」とは言わなかった。せっかく釣り場まで来てケンカしたくなかったから。

それにしても、いつの間にか（いない魚）と自分の姿を重ね合わせている自分に怖くなった。結局このテーマはやめる事にした。そのかわり「私のきらいなもの（人）」というテーマにする事にした。

私のきらいなもの（人）。「巨人・若貴・卵焼き」（卵焼きを食べ過ぎて、コレステロールの値が高くなった）。なぜ巨人がきらいなのか、といわれても、きらいなものはきらいだ。今日の朝も、私の子供が私のつくった野菜料理を残したので文句を言うと、「きらいなものは、きらいだ」とさっさと学校へ行ってしまった。野菜が好きな子供はいい子、巨人が好きなのはみんなとうまくやっていける。「好きなもの」には理由はいらないが、きらいなものはどうしてか理由がなくてはならないようだ。巨人が好きな奴はロクなものはいない。これも実感ではあるが理論的ではない。

次回からは、理論的な故事つけをして、「私のきらいなもの（人）」を書いて見たい

## 『助 教 授』 考

— 筋違いの恩師・故徳田御稔助教授のこと —

奥 野 良 之 助

( 1 )

向こうはそうとは思っていないだろうが、私のほうは勝手に「恩師」と思っている、徳田御稔（とくだみとし）という人がいる。いや、もう亡くなられたから、いた。私が大学の3年生になり、動物学科というところへはいったとき、徳田さんは講師であった。

この、講師というポストは、よくわからない地位である。大学の講座は、正式には、教授・助教授・助手からなる。教授は講座を主催し、助教授は教授を助け、助手は教授・助教授を助ける、というのが、それぞれの職務内容である。講師はこの系列からはみだしているらしい。

もっとも、わが金沢大学理学部では、学位を持ってない人は助教授にしないという内規があって、そういうとき、助教授のポストを講師にふりかえて使っている。学位を取ったら助教授にしてやるぞ、というわけである。ついでにいうと、この内規は、教授には適用されない。学位のない人は、助教授にはなれないが、教授にはなれる。なぜこんな変なことが生じたかかという、理由はきわめて簡単で、この内規ができたころ、学位のない教授が何人かいたからにすぎない。生物学科に、学位がないばかりに、定年寸前まで講師にとめおかれていた方がいた。その方が、金沢まで植樹祭にやってきた昭和天皇の案内役をつとめた。すると、「天皇のご案内役をつとめるような偉い人を、講師にとどめておくわけにはいかない」という意見が、生物学科ではなくよその学科の教授から出てきて、この方は定年1年前に2階級特進して教授になった。だから、学位がなくとも、助教授にはなれないが教授にはなれるのである。

かねがね、当学会不名誉会員第2号である数学科のT教授は、私がいつまでも助教授でいることを、不当だと思っておられた。本人が不当だと思っていないことを他人が不当だと思ふのも少々おせっかいだと思ふが、よくあることではある。かのF助手など、ノーベル賞に値する研究をしているにもかかわらず、いまだに万年助手におかれているが、当人はどうやら不当だとは思っていないらしい。もっとも、この場合は、研究とはまったく別の理由で、他人もあまり不当だとは思っていない。それはともかく、この話を聞くとT教授はさっそくやってきて、「君にも能登島の

水族館で天皇の案内をさせるのだった」と残念がった。ただし、T教授の本心は、私を教授にしたらどうするか、それを見てみたいというもので、決して私のことを親切に考えているわけではない。教授にして困らせてやろうというわけである。だから、もちろん私はそんな手にはのらない。

断っておくが、私はその方が教授にふさわしくないなどと言っているわけではない。学識経験ともに立派な方で、学位がないからといって講師にとどめておくほうがおかしいのである。だから、そんな方を、天皇の案内をしたという理由で教授にするということはもっとおかしい。

もともと、学位などというものに、そんな権威を認めることはない。私はドクターコース1年中退で水族館の飼育係になった。ご機嫌で魚の飼育をやっていたのだが、と書くとちょっと正確ではなく、魚の屠殺をやっていたというほうがまだ当たっているが、まあ、それはともかく、ある日の家内との会話がもともと、学位を取ることになってしまった。それは、「京都大学の大学院を出てるいうから、どんな勉強家やろと思てたら、テレビばかり見て、ちょっと勉強せえへんね」という、家内の一言からはじまった。「机にかじりついて本読むだけが勉強やない。テレビを見てても、頭の中ではちゃんと勉強してるんや」そんなことでは、本性唯物論者である女性の納得は得られない。「そんなら、どうしたら納得するんや」「学位でも取ってみたら」かくて私は、いそがしい飼育の仕事(?)の合い間をぬって、学位論文を作成せざるを得なくなったのである。

私の形式上の恩師である、いや、この方も亡くなられたから、あった、宮地伝三教授は、そのころやはり学位論文を提出していた私の2、3年先輩の人の原稿をよんでくれて、参考にしろという。読んでみると、私と同じく魚の社会行動を論じたものだが、私と正反対の結論が出ていた。おやおやと思ったが、その論文に合わせて結論を正反対にするわけにもいかない。予定通り提出したのだが、二人とも無事学位をもらったのである。

なぜこんなことになるかという、論文審査の主査であるにもかかわらず、宮地教授は私の論文を読まなかったからである。なぜ読まなかったか。定年間近かの宮地教授は、英語を読むのがしんどいという(私は英語で学位論文を書いたのだぞ)、ただそれだけの理由だった。京大の定年は63歳だから、当時の宮地教授はちょうど、今の私くらいの年齢であった。私はそんなことはない、と言いたいところだが、ずっと前にそうなってしまうている。日本語だってあまり読まなくなった。だが、書くほうはますます勢いついている。《会長に執筆中枢麻痺剤を飲ませなくっちゃー編集局長補佐》

宮地教授は、論文も読まずにどうして審査をしたのだろうか。大学というところは、内容に関してはそうとうにいい加減だが、形式に関してはきわめてうるさいところである。主任教授が論文を認めただけではだめで、学部全体の教授会で報告して承認を得なければならない。その時、「学位論文の要旨」と「学位論文審査結果

の要旨」という二つの文書を教授会に提出しなければならぬ。この中でその論文を誉めちぎるのである。そのためにはどうしても論文を読まなければならぬのだが、読まずにすませる方法もある。

論文を通す気になった宮地教授は私を呼んで言った。「これ、君が書いてきなさい」「えっ、僕が書くんですか!？」 今なら驚かないが、その時はまだ若かったからびっくりした。「この論文については、君がいちばんよく知ってるはずや」「そら、そうですけど」

「論文要旨」のほうはまだいい。自分の書いたことを要約すればすむ。困ったのは「審査結果要旨」のほうであった。何しろ、その研究がいかによぶらしいか、誉め称えなければならぬのである。これも、今なら苦にならないが、まだ30歳前の青年である。手放しで自分を誉めるなどということは、そうとうに恥ずかしいことだった。でも、やむを得ない。心を鬼にして、歯の浮くような文章をつかって持っていったところ、「誉めかたが足らん」と言って却下された。

そのころ、鉄腕アトムなるマンガをテレビでやっていた。4、5歳になった私の息子がそれを見て、「お父さんは博士やろ」という。「そうや」と言ったら、「お茶の水博士はなんでもできるのに、お父さんはなんで、なんにもできへんのや」ことは親父の権威にかかわる重大事である。「お茶の水博士は『はかせ』やろ。お父さんは『はくし』や。『はかせ』と『はくし』はちがうんや」 息子はこれで黙ったが、納得したかどうかは知らない。

まあ、学位などというものは、およそ、こんなものである。旧制大学時代の博士は、それなりの権威があった。医学博士は別にして、というのは、医学博士は旧制時代から医者看板として使われていたからだ、学位はその人の一生の研究の到達点といったものであった。新制になってからは、学位をとって初めて一人前の研究者とみなされる、出発点になったのである。だから、旧制と新制では、学位の重みはちがっている。

湯川秀樹の兄さんで、貝塚茂樹という中国文学者がいる。この方は、亡くなったかどうか知らないで、いる、か、いた、か、どちらにすればいいのか決めかねる。ともかく、大学制度が旧制から新制に切り替わったとき、この貝塚大先生に学位がないということがわかり、弟子があわてた。別にあわてる必要はないと思うが、やはり自分がもらうとき、学位のある教授からもらいたかったのだろう。そこで弟子どもが集まり、貝塚教授に学位の申請を勧めたのである。大先生、ニヤリと笑って、「出してもいいけど、わしの論文、誰が審査するんや」と言ったとか。こういうことは、一度言ってみたいね。

いまの制度では、博士の前に修士という学位がある。私は金沢大学で、博士課程のほうの関係教官にはなっていないが、修士課程では、れっきとした関係教官である。そこで、毎年、何人かの修士論文を審査しているのである。まあ、それで、現代の修士論文の内容はよく知っているが、あまり公開はしたくない。修士は、マス

ター・オブ・サイエンスの訳語である。「お前ら、サイエンスのマスターになったんやぞ。すごいなあ」と、修士になった院生にいうと、たいてい恥ずかしがる。

なんの話をしているのか、さだかではなくなってきたが、まあ、学位なんてものは、この程度のものである。学位を持っていないから助教授にしないとか、そんなつまらぬことを考える暇があれば、自衛隊海外派遣反対のピラのひとつもまいてほしい。もっとも、彼らにとっては、学位の権威づけというのは、きわめて大事なことであって、学位が権威づけられないと、大学そのものが崩壊する危険がある。ふつう、内容があって権威が生じるのだが、権威というものはいったん生成すると、内容を置き去りにしてひとり歩きしていく性質を持っている。「偉いから博士だ」から、「博士だから偉い」に転換するのである。わが息子は4、5歳にして、その真相を見抜いた。だから、なんにもできないくせに博士になった父親、つまり私を、批判したのである。学位に権威がないことが明らかになれば、その学位を認定した教授にも権威がなくなる。その教授が選出した学部長も学長も権威失墜である。かくて、内容のない権威に支えられている大学そのものが崩壊する。

## (2)

文章というものは、なにか書きたいことがあって、書き始めるものである。かつて、日本生物学会の第3編集局長に任命した男は、いま、ある醤油会社に勤めているが、この間、私の同僚の先生のところの手紙が来て、醤油会社を辞めると言っているそうである。理由は、まだ遊び足りないからだ、とか。貯金と退職金で2、3遊ぶつもりらしい。私に言うと怒られそうだから、なにも言っていない。この3局長が、書きたいこともないのに書きはじめ《会長が強制したから、書いたのじゃないですか：3局長。妙なところへ出てこずに、おとなしく遊んどれ：会長》、まったく内容のないことを書き連ねて、しかも読ませるといふ、珍しい才能の持ち主だった。うそだと思う人は、本誌第26号の「編集局だより」を読んでほしい。もちろん、こんなことは誰にでもできる芸当ではない。私にだってできない。そこで私は、まず書きたいことを決めて、それから書き始めることにしている。この『助教授考』も、だから、書きたいことがあったのである。ところが、いざ書き始めてみると、こと志と異なって、話は思いもかけぬ方向へ発展していつてしまった。

むかしはこんなことはなかった。書くことを決めたら、簡潔にして的確に、書きたいことを書いたものである。まあ、ときには行きすぎて、書いてはいけないうまで書いてしまうきらいはあったけど。このごろは、しかし、どういうわけか、話が止めどもなくずれていくのである。思うに、ずれていく話を止めるだけのエネルギーがなくなってきたかららしい。《書くエネルギーのほうは、まだ大丈夫みたいですね：6局長》年齢は取りたくないものである。といて、勝手に取ってしまうものを止めるわけにはいかない。

という訳で、本当の話は、徳田講師のことであった。彼は、ネズミの分類系統学の専門家で、戦争中軍属として旧大日本帝国陸軍に徴用され、ジャワ島でベスト防止の仕事をさされていた。あんまり熱心に協力していたとは思えないが、それでも、敗戦とともにオランダ軍に捕まってしまった。

「インドネシアいうたら、ええとこやぞ」「へえー、どんなとこがええんですか」「あのな、インドネシア語でキラキラいうのは、およそ、いうことや。向こうでは人の年齢きいても、『キラキラ40』ですませて、日本みたいにこまかく聞けへんのや」

当時の徳田さんは40歳を越え、そろそろ年齢の気になる歳だったが、こちらは二〇歳すぎたばかりの若手、この話は全然ピンとこなかった。「なにしろ暑いところやろ。そこらの林の中で、ニッパヤシの葉っぱで屋根葺いて、そこらのバナナでも食べてたら生きていけるんや。仕事せんならんとか、出世せなあかんとか、思わんでもええんや」まだ食べ物に不自由していた私は、この話には魅力があった。いまでも、退職したら南の島へいってのんびり暮らしたいという気が、心のどこかにある。もっとも、インドネシアへはあまり行く気はしない。敗戦後、スカルノ大統領の演説を雑誌で読んで感激し、入れこんでいた時もあったのだが、東チモールの少数民族を弾圧している今のインドネシアは、好きではなくなった。行くのなら、旧日本の委任統治領だった、「南洋群島」がいい。《そんな小さな島へいったら、一年に3万キロも走れませんよ：6局長。車やめてモーターボートにするから、心配するな。おれはほんとうは船のほうが好きなんや：会長》

船から荷物を揚げる荷役をやらされた話も面白かった。船から細い板を渡して、荷物のかついで渡るのだが、その時、わざとよろけて、荷物を海へ落としてしまう。そして、隙を見て拾い上げ、捕虜みんなで分けるのだそうである。もっとも、徳田さんはそういう肉体労働は免除されていた。オランダ軍当局が免除したのではない。捕虜仲間が免除してくれたのである。体力のないかわり、英語がしゃべれた徳田さんは、当局との交渉係をやっていたらしい。「能力に応じて働き、必要に応じて取る」というのは、マルクスの共産主義社会の理想だが、「捕虜になったら、共産主義が実現するで」とご機嫌だった。

まあ、徳田講師は戦争中でも、まじめに軍隊に協力していたとは思えないが、私の「反面恩師」である森主一助教授のほうは、第一線小隊長として、まじめに毛沢東と戦争していた。この話は、以前どこかで書いたことがあると思うが、そして、こんな話を書くとしたら、『日本生物学会誌』以外にはないと思うが、まあ書いた本人が忘れていたのだから、読んだ人が覚えているわけではないということにして、また書くことにするが、中国戦線で森少尉が小隊長を率いて行軍していたところ、前方の林の中から狙撃兵が鉄砲を撃ってきた。森少尉は、「これはいかがすべきや」と一瞬考えて、そうや、まず兵を散開（行軍体形を解いて散らばらせるということです）ささんと、みんなやられてしまう、と気がつき、「全員、散開！」とどなっ

て後ろを見たら、ついてきているはずの小隊が、影も形もなかったそうである。学徒兵出身の将校森少尉とちがって、百戦練磨の兵隊たちは、敵が鉄砲を撃ってきた瞬間に、何も考えず、自分たちで「散開」してしまっていたというわけである。

これは、まだ書いたことはないから、大威張りで書くことにするが、この森少尉が兵役を解かれて日本内地へ帰ってきたところ、宮地教授をはじめ、動物学科の先生方は、まじめに戦争協力をやっていない。そこで、森元少尉が大いに怒って、みんなを戦時研究に駆り立てた。その上、軍事訓練まで施したのというのだから、当時の先生方は大いに迷惑されたことだろう。なんでも、京都市がアメリカ軍に占領されたという想定で、森元少尉以下、先生も学生も比叡山にたてこもる。そして、夜な夜な京都まで下りてきて、スパイ活動の訓練をやったらしい。「その時になあ、忍術の先生をよんできて、教えてもらうんや。松の葉っぱを食べたら身が軽くなる、言われて、松葉をしがみながら、夜の京都の街を歩いたもんや」

まあ、私もそのころ、バケツと火はたきで、B29戦略爆撃機に本気で対抗しようとしていたのだから、あまり批判はできないのだが、ともかく、日本は負けるべくして負けたことは、たしかのようである。断っておくが、これらの話は、私のつくり話ではない。紀州白浜の臨海実験所で実習中、夜な夜な森助教授どの本人から直接に聞いた話ばかりである。

さて、戦争中のこのような戦争協力を、戦後深く反省されたこれらの先生方は、たいてい左翼の革新派になった。私が動物学科にはいったとき、新入生歓迎会というのがあって、といっても、お茶ひとつ出るわけではなく、新入生を並べておいて、先生方が一言づつ、説教する会なのだが、その時、今や教室の最左派に位置する（これも、本人から直接聞いた。もっともそれは、本人の『意識』であって、『客観的事実』であるとは、私は言わない）森助教授が、今は亡きソ連邦の科学を誉めたたえる演説をされたのにはびっくりした。当時私は、政治や社会運動など何も知らない、今でいえばノンポリ学生の典型みたいなものだったからである。ちょうど、朝鮮戦争たけなわのころで、アメリカ空軍の花形戦闘機シューティング・スターが、ソ連製のミグ15戦闘機に、ばったばたと撃ち落とされていた。「われわれ科学者は、アメリカ、アメリカと言わず、もっとソ連の科学を勉強しなければならない」と、ミグがロッキードをやっつけていることを例にあげて、力説されたのである。

その同じ歓迎会で、徳田講師のほうは、ネオテニー（幼形成熟）の例をあげて、発生の遅滞が大進化につながるという話をした。これは、実は、それに先だって強制された新入生の挨拶の中で、私が、高校で生物をとらず、生物のことは何も知らないと言ったことに対する答だった。「ふーん。知らんほうがええんか」と、素直な私は自信を持ち、それ以来、自信だけでやってきたそもそもの原因である。この徳田講師なる人物が、何者であるのか、当時の私はまったく知らなかった。ただ、この初対面の歓迎会での話に興味を持ち、その後しげしげと部屋へ押しかけているうちに、これは面白そうだ、弟子入りすることにしよう、勝手に決めてしまった。

そこで、ほとんど洗ったことのない、見るからに汚い徳田さんの茶碗と急須をきれいに洗って、弟子入りした。

この話を、私の部屋へしょっちゅう出入りしているくせに、そして、私と同じくカエルの調査をやっているくせに、どこへいっても「ぼくは奥野先生の弟子ではありません」と断わっているある、院生にしてやった。彼はそれから茶碗を洗わなくなった。

あとで知ったのだが、このころの徳田講師は、生物学界における若者の偶像的存在だったのである。敗戦直後に、『生物進化論』（民主主義科学者協会発行の文庫版）、つづいて『進化論』（岩波全書）を書いて、一躍若者の心をとらえた。高校生のころにこれらの本を読んで、徳田講師のもとを目指す人も多かつたらしいのである。そんな偉い人とは知らずに、「怪ったいなこと言うおっさんやな」と思っつきあい出したところ、たしかに怪ったいな人で、私はその学問ではなく、そこが気に入ってしまったのだが、本を読んで感激して弟子になった人は、その怪ったいなところについていけないらしい。

たしかに、徳田講師を偶像視して、そのいうことを真面目に実行しようとするれば、あとで怒ることになるのは目に見えている。私が水族館へ就職したころ、瀬戸内海にシャチが2匹、泳ぎ回っていた。この夫婦のシャチは、その前年くらいから瀬戸内海にはいりこみ、魚や、世界最小の鯨スナメリなどを食べてご機嫌だったらしい。岡山県の笠岡というところで、農林省の下請け調査をしていたとき、このシャチに私達はであっている。調査を終え、5トンほどの小船で帰る途中、沖のほうでクジラが2匹、とんだりねたりしていた。潜って魚を突くための小さな水中銃を持っていたので、船頭に「あれ、捕りにいこうや」と言ったら、船頭はものも言わず、船を港のほうへ向けてしまった。あとで図鑑を見たらまぎれもないシャチで、行かなくてよかったと、胸をなでおろしたことがある。

そのシャチが、明石海峡に現われ、漁師が怖がったので、海上保安庁が巡視船を出して鉄砲で撃ったが、ていよくあしらわれただけに終わった。そこで、兵庫県が和歌山の太地からクジラ捕りの船を呼び、1匹だけ討ちとめた。なんと、全長10メートルもある巨大なオスだった。

このシャチの肉は市場で売り、脳は兵庫県立医大（現神戸大学医学部）が引き取った。残った骨を水族館がもらったのである。運び込まれてきた骨は、巨大な上に半ば腐った肉がたくさんついている。なんとかしなければ、臭くてやりきれない。私は直ちに京都へとんだ。そして、徳田講師に、如何にして骨格標本をつくればいいのかを聞いた。

「そらなあ、奥野君。オタマジャクシに食わせるのが一番ええで」

というのが、徳田講師の答えであった。

彼が専門にしていたネズミのような小動物なら、これがいちばんうまくいく。何でも食べるオタマジャクシは、骨のすみずみまで文字通りなめとってくれる。しか

し、ものは10メートルのシャチの骨である。何十万匹のオタマジャクシがいるか、見当もつかない。

私は、こういうことを徳田さんに聞いたことが間違いであると反省して、そうそうに退散した。

そのあと、しばらくして京都へ遊びに行った時、徳田さんのところへ、まじめそうな新生が来ていた。私が、どういうきっかけか忘れたが、中生代末期の恐龍の絶滅の話をしたところ、先生どういうわけか面白がって、その新生に、「おい。君はこれを卒業研究のテーマにしろ」という。なにしろ、偶像のいうことだから、その学生は感激している。これは大変だと、私はそのあと、彼にコーヒーを飲まして、あの先生の言うことをまともにとってたら身の破滅だと、こんこんと論じたことがある。

徳田さんが亡くなって、その直弟子が集まったことがあった。どういうわけか、筋違いの弟子である私も呼ばれたので行ってみた。直弟子と筋違いの弟子がどちらがうかという、直弟子は、徳田進化論の学問内容に魅かれて弟子になった人たちであり、筋違いの弟子は、学問内容とはほとんど関係なく、『怪ったいなところ』に魅かれて弟子になった人である。後者はごく少なく、私と、強いて言えば私の唯一の同級生である水原洋城と、二人くらいしかいない。その集会では、恩師の徳田進化論をいかに継承しいかに発展させるかということが、議論の中心だった。私は、徳田進化論の内容をよく知らないから、そんな議論にははいれない。ただ、心の中では、あんな怪ったいなもん、継承できるはずないやんけ、と思っていた。最後に意見を求められたとき、ついうっかり、思っていたことを言ったら、なんとそれに意欲する人が多くて、とうとう、徳田進化論は一代限りということになってしまった。まあ、あとで述べるが、徳田さん自身、私みたいな筋違い弟子ならともかく、本筋弟子はとるのをいやがっていたから、一代限りで満足されてると思う。私も、一代限りというのが好きである。つづかそうと思っても、「日本生物学会」の二代目会長は一向に見つからない。

### (3)

さて、戦争中の「悪業」を反省し、民主主義に目覚めた先生方は、何をしたかという、教室の民主化ということをやった。

明治の初め、日本に大学をつくる時、政府はドイツの制度と取り入れ、講座制を大学の基本にした。今でも大学の研究費は、講座費という項目で出ている。それどころか、大学の経費は講座費しかないのである。とって、講座費を各講座にすべてくれるかという、そうではない。そんなことしたら、学部事務局も大学事務局も、ひいては文部省も、予算がなくなって成り立たなくなる。そこで、講座費は、まず文部省にとられ、大学事務局にとられ、学部事務局にとられ、やせほそってか

ら講座にくることになっている。実質はこのように軽視されているが、形式的には大学の中核は講座である。

その講座を主催するのが教授であり、助教授と助手は教授を助けるのが本務である。つまり、講座を独裁的に支配し、助教授、助手、ついでに、院生、学生も入れて、手足のように使って研究教育を行なうのが、教授ただひとりという制度なのである。ちょうど、中世封建社会の君主みたいなもので、まあ、君主にしては家来が少なすぎて気の毒だが、法令は、その君主的権限を保障している。そこで、教授はずっと、その権限を行使してきた。

いまどき、こんな権限を与えるなど、時代錯誤もはなはだしいが、法規上ではちゃんとつじつまを合わせている。それは、教授選考規定に、学問上の業績だけでなく、「人格、識見ともに優れている」という項目が入れているからである。つまり、教授は人格者でないと行かないのである。ちなみにいうと、助教授選考規定にはそんな項目はない。だから、助教授は人格者でなくとも勤まるのである。《ああ、それで会長はずっと助教授のままなんですねー6局長》

もっとも、何をもって「人格に優れている」と判断するかは、法規には書いてない。ということになると、すでにその選考規定に合格し、現に教授になっている人の「人格」から判断せざるを得ない。

金沢大学の能登臨海実験所の所長が公募された。もちろん教授である。私の一年先輩の人が応募した。この人は、研究し、論文を書き、本を出版すること以外に何もしない、ことはないと思うが、と思えるほど、たくさん論文や本を書いた人である。ところが、この人は落とされ、なんと海水アレルギーの方が臨海実験所所長になった。そこで私は、ちょっと知っていた物理学の教授のところへ行って、選考課程を聞き出した。

この教授は、教授にしては面白い人で、同じ京大だからといって、私が金沢大学へ着任するとすぐ呼びつけられた。「わしは、君の選考の時、『海へ潜って魚を見るというのが、科学か』と言ってやったんだよ」と、のっけから、当の私に言うような人である。「まあ、あんまり科学だとは思えませんね」と答えたら「そうだろう」とご機嫌だった。最近聞いた話だが、この教授は京大の宇宙物理学教室の出身で、なんと同級生がなく、たったひとりだったそうである。「わしは、京大を一番で卒業したんや」と言うのが口癖だったらしい。京大を1、2を争って出たというのが私の自慢だったが、上には上がいるものである。それはともかく、この人は、少しおだてると、何でもしゃべってくれる人だったから、その後も時々お邪魔していたのだが、現役で亡くなられた。良い人というのは、早死にしていけない。《「日本生物学会」は、当分つづきそうですね：6局長。どういう意味や：会長》

「今度の臨海実験所の所長選考ですけどね。選考基準は何だったのですか。業績ですか」

もし、業績だと言ったら、こちらにも考えがある。日本広しといえども、その人

に業績で太刀打ちできるものはまずいない。すると、彼は答えた。「そりゃ、君、人柄だよ、人柄」「ははあ、人柄ですか」

この時私は、教授選考における「人格にすぐれたもの」という規定の意味を、完全に理解した。なるほど、所長に応募したわが先輩は、教授としての「人格」に欠けている。彼は、まじめで、優しく、勉強以外、悪いことなどできる人ではないのである。もっとも、学生時代には、私と水原が日和見した（逃げた、ということです）あるデモ隊に敢然と参加して、京大の門を出たところで機動隊に粉砕され、逃げかえってきたようなこともやっていたが。それで、私はずっと尊敬してきたのだが、後になってその時のことを話すと、彼は「いや、なんにも知らずについていただけです」と答えた。どうやら、そのデモが危険だとはお気づきになっていなかったらしい。ことほど左様に、「人格」に欠ける人であった。たしかに、彼のように良い人が、臨海実験所所長なんかになったら、やっていけそうには思えない。大学教授は、「良之助」では持たないのである。助教授なら持っているが。

というわけで、戦前の大学は、教授があらゆる権限を振りまわす、封建社会そのものであった。そこで、大学における封建制の打破が、これらの革新的に目覚めた教官の目標になった。封建主義に代わるものが民主主義である。助教授、講師、助手が連合して教授に対抗し、ついに「教室会議」なる民主的制度をかちとった。

私が動物学教室へはいった1953年には、この教室会議制度は完備していた。まず、下部組織として、教官会議、雇用職員会議、大学院会議、学生会議の四つがある。それぞれの問題はそこで議論して決める。二つ以上にまたがるような問題は、これらの会議が合同してより上位の会議を開く。全教室員にかかわる問題は、全部の会議が合同し、これが「教室会議」となる。研究費とか、教官人事とか、学生・院生の就職とかは、教官会議と大学院会議が合同して、「研究者会議」を開くことになる。実は、初めはここに、学生会議もはいていたらしい。ところが、私の3、4年先輩の学生が、あまりにも頻繁に開かれる会議に嫌気がさし、こんな会議は勉強の邪魔だといって、学生会議は教室会から独立してしまったのである。だから、私が入ったときには、学生会議はかやの外におかれていた。ちなみにいうと、この学生会議独立の首謀者は、いまや国際免疫学会の会長などをつとめ、分子生物学界のその人ありと知られている、あの岡田節人氏その人であった。

各会議には、当然議長がいる。教官会議の議長は、森少尉こと、森助教授であった。そして、研究者会議の議長も兼ねていた。学生会議のほうは、どういうわけか、いつのまにか私が議長になっていた。大学院会議の当時の議長が誰だったかは覚えていない。

当時の教室会議の大問題は、助教授人事であった。「分類・系統・細胞・遺伝」というにぎやかな看板をかかっていた第1講座に、助教授のポストがひとつ来たのである。そして、徳田さんがこの講座の講師であった。まあ、ふつうに考えたら、徳田講師を徳田助教授にすれば、簡単にすむ。京大には、学位なきものは講師どま

り、などという変な内規はなかったけど、もちろん徳田講師は学位も持っている。論文もたくさんあるし、著書も数冊あり、若者の偶像にさえなっている。内容を問題にしなければ、そして、業績で選ぶ場合、大学では一切内容を問題にせず、数もしくは重さで決めるのだが、そうしないとほとんどの教官が落第してしまうからだが、徳田講師が助教授になることに、なんの支障もない。

にもかかわらずこの人事は、教官会議と大学院会議の合同である研究者会議で議論されていたのだが、もめにもめて、なかなか決まらない。学生会議はすでに述べたように排除されているから、議論に加わることはできない。だが、傍聴はできる。私は議長としての責任上、全ての会議を傍聴した。そのころ私は、大学の先生とは偉い人だとほんとに思っていたのだが、《ウソでしょう：6局長。ほんまやで：会長》この傍聴で、その信念に初めて疑念を生じたのであった。

この、会議の傍聴というのは、その面白さがわかると中毒する。もちろん、会議の90%くらいはつまらない議論で退屈するのだが、ほんのときたま、すばらしいドラマが展開することがあり、それが中毒の原因になる。とくに、いつも自らを守り、滅多に本心を明かさない、教授や助教授といった偉い人が、ちらりとのぞかせる本心を見たときなど、やった！ という心境になる。もっとも、これは学生の立場で、しかも傍聴だからそうなので、それから10数年後金沢大学へ来たときは、助教授として教室会議に出席し、学生の傍聴される身分になったが、これはあまり面白くなかった。学生のほうは面白がっていたが。

こうして、傍聴しているうちに、大学に渦巻いているさまざまな利害関係を、学生の身分で知ようになってきた。これはほっとくわけにはいかないというわけで、学生会議を招集し、この人事にかむことになった。議論するまでもなく、学生は徳田講師の助教授昇進を決議した。そしてすぐそれを教室会議へ持っていった。その時、めずらしく議長の私は用事で欠席したのだが、「徳田講師の助教授昇進を要求する」という決議文を読み上げたたん、教室会議は騒然となったらしい。ある教授は、当の第1講座の教授だったのだが、そして、この教授が徳田助教授昇進に反対する中心人物だったのだが、「こんな不愉快な会議に出ている気はしない」と言いはなって退席したらしい。

あとでその報告を聞いた私は、これは大変なことになったと、少々あわてた。なにしろ、内容のない、権威だけの議長である。そのころはまだ、教授に問いつめられて返り討ちにするほどの自信はなかった。この時、一部の教官がなぜ怒ったかという、本当は学生が徳田さんを支持したからなのだが、形式上の理由は、民主的教室会議の一員でありながら、勝手に決議して突きつけてきたのは、民主主義にもとるということだった。ところが、すでに述べたように、学生会議は教室会議から独立しており、いわば、民主的教室会議からしめ出されていたのである。しめ出されたものが、何を決議しようと、何を要求しようと、怒られる筋合いはない。この時ばかりは、教室会議独立宣言を発した岡田節人氏に感謝した。

その日のうちに理論武装をしたわれわれは、教室会議からの攻撃を今やおそしと待ち受けていた。ところが、敵もその理屈に気がついたのか、一向にやっこない。夜になって、会議を退席した当の教授が、われわれのいる学生控室にやってきた。そして、そのことにはまったくふれずに、われわれ相手に世間話をご機嫌である。まあ、こちらも、強いて事を荒立てるつもりはなく、そのつまらぬ世間話につき合っていたら、「ああ面白かった。じゃ、さよなら」と、教授は帰ってしまった。

その時は、「いったい、何のことかいな」と思っただけだったが、のちに、少し世間の常識を知るようになって、それがいわゆる「手打ち式」であったことを理解したのである。

いったんは、しゅんとなった私も、たちまち元気をとりもどし、学生会議議長として、毎回必ず、この人事が議論されている研究者会議に出席した。傍聴だから、もちろん発言の権利はない。私は、片隅にすわっておとなしく聞いているだけである。ところが、思いもかけず、会議メンバーが私のことをものすごく気にするのである。教授であろうが助教授であろうが、何か発言するときには、私のほうをちらちらと見たりする。私がメモをとっていると、発言が途中で尻切れトンボになったりしたこともあった。学生にとって、これほど面白いことはない。

もうひとつ面白かったことは、その会議にメンバーとして出席していた大学院生まで、私の存在をひどく気にしたことである。会議は、最終段階でとうとう秘密会を宣言した。秘密会、つまり傍聴者をしめ出す提案をしたのが、実は教官ではなく院生だったのである。私は、その理由を聞いた。「僕がいたら、何かしゃべりにくくてもあるのですか」その時は正直そう思ったから聞いたのだが、まあ、この質問は意地悪の極致で、答えられるはずはない。彼は、「人事というものは、本来秘密なものなんだ」と怒り出した。偉い人があかん人に答えられなくなると、だいたい怒り出すものであることも、この時初めて知った。

こうして私はしめ出されたのだが、会議が終わるやいなや、ある院生が私たちのところへやってきて、「あのあと、面白かったで」「へえー、どうなりました」「あのな・・・」彼は、こちらが何も聞かないのに秘密会の内容を事細かくしゃべってくれたのである。「ふん、ふん」と全部聞いてから、「ほんとはね、秘密会で話されたことは、ほかで言うたらあきまへんのだ」と、秘密会の意味を彼に教えてやったら、彼はびっくりして「今言うたこと、内緒やで」と言い捨てて、逃げていった。いらんこと言っつて、貴重な情報源を失ったことになる。あのころは、私もまだ若かった。

研究者会の議論は一進一退、なかなか進まなかった。ところが、ここでひとつ問題が起こった。それは、当の徳田講師が、助教授昇進をいやがり始めたのである。そして、まったく別の人を推薦した。この段階で本人がそんなことすれば、情勢はがらっと変わってしまう。「おい。お前が行って、徳田さんを説得してこい」「あ

んなおっさん、説得できるはずないやないか」「お前、議長やろ。できてもでけんでも、とにかく言うてこい」というわけで、私は徳田講師の説得におもむいた。

「先生。ごじゃごじゃいわんと、助教授になってください」「僕、講師が好きなんや。助教授なんかきらいや」「そらまた、何ですか」「あのな、奥野君。講師やったら、講義だけして研究指導はせんでもええんや。そやけど、助教授になったら、学生がきても断るわけにいかんようになる」「ええやないですか、研究指導しはったら」「僕に教育の能力があると思うか」私は、もうちょっとで、「そら、無理ですな」と言うところだったが、ぐっとおさえた。「大丈夫ですよ、先生。僕が保障します」「そうかな」

金沢大学理学部の数学科に、生物学会不名誉会員第2号となったT教授なる人物がおられる。教え子のU講師から仲人を頼まれた。「ぼくに仲人がつとまると思うか」と聞かれたU講師は、しばらくじっと考えて、「思いません」と答えたそうである。私よりU講師のほうがはるかに真面目だったということである。もっとも、T教授は、「あいつは、ひどい奴や」と怒っていた。もっとも、そういう噂れがましいことが大嫌いなT教授は、その答えて助かったのである。

ついでに言うと、私は結婚するとき、一緒に海で調査していたある先生に仲人を頼んだ。この方は、まだ助手だったが、貝類の分類にかけては日本の権威だった人である。もっとも、この方も少々「怪しいな」人ではあったが、私の申し込みを受けた彼は、尻込みした。私の指導教官であった宮地教授に遠慮したのである。そして、「宮地さんに頼んで、断われたら、ぼくがやってやる」と約束した。その頃私は、宮地教授の不肖の弟子として、自他ともに許していたから、宮地さんは断わるにちがいないと自信があった。それで、一応宮地さんに頼んでみたら、何と二つ返事で引き受けたのである。気に食わなくても不肖の弟子でも、仲人を頼まれると断わらないという、学者の本性を見誤ったことになる。

それはともかく、徳田さんのほうは、どういうわけか「僕の保障」を信用してしまったのである。そしてふたたび、助教授に立候補された。ずっと後だが、京都へ徳田さんを訪れたとき、彼は机に向かって勉強していた。私の顔を見るといきなり、「助教授なんかになってひどい目にあってる。大分寿命がちじまったぞ」「そらまた、何ですか」「こうやって勉強せんならんやないか」「それでも、弟子がきたら面白いでしょう」「そんなことない。しんどいだけや。わしが死んだら、お前、香典2倍持ってこなあかんぞ」「死にはってからやったら、2倍でも3倍でも持ていきますよ」「ちゃんと娘に言うとかからな」

徳田さんがなくなられたとき、私は香典を2倍持っていった。もっとも何を基準にして2倍かは、はっきりしないが。

こうして、徳田講師はついに徳田助教授となった。そして、ぞくぞくと、というほどでもないが、徳田さんの名声を慕う学生がやってきて、徳田さんは無理して教育し、学生はとんでもない教育をされて困惑することになったのである。

さて、徳田さんはこうして助教授になったのだが、ずっとそのまま据え置かれ、一向に教授には昇格しなかった。会社でも似たりよったりだが、お役所では給料は号級制度なるものできっちりと決められている。たとえば、大学教官には「教務職1」という給与表が適用されており、教授は5級、以下、助教授4級、講師3級、助手2級、教務助手1級となる。ついこの間まで、教授が1級で教務助手が5級だったのだが、どういうわけが反対になった。人事院の役人の暇潰しだろう。

この各級は、それぞれ1号から20数号まで、こまかく号にわかれている。その号を、1年にひとつづつ上がっていくわけである。ところが、たとえば助手(2級)の1号から出発したとしても、20数年経つと、助手としての最高号級に達する。もうこれ以上号がない。つまり、給料が上がらなくなるのである。これを、「頭打ち」と称する。私の身の回りにはどういうわけか何人もいるが、ふつうは助手のままで定年まで留め置かれるなどということはない。時期が来れば、助手は助教授に昇格する。すると、助教授の4級というのは、助手よりもはるかに高い給料まで、号がつづいている。だから、助教授になれば、また1年にひとつづつ、階段を上ることができるようになる。

とはいえ、定年近くなると、助教授の級でも、号がなくなる。教授に出世しなければ、助教授でも頭打ちになるのである。なぜそういうふうにつくってあるかというと、助手は助教授に、助教授は教授に、出世しないと給料もあがりませんよと、みんなに出世を強制するためである。馬といっしょで、人間もニンジンをぶらさげなければ働かない、と固く信じている人が、給与表をつくっているから仕方がない。まあ、あの土井たか子女史ですら、衆議院議長という「ニンジン」には食いついてしまったのだから、そう考える人がたくさんいても止むを得ない。

「すると、どんなニンジンにも食いつかない我々は、能登のトキのごとく、貴重な存在やなあ」と言ったら、かのF助手は、「もうすぐ減びそうね」とのたまった。もう一人の「トキ」、S助教授は、「そら、わからんで」という。「何でや」「何でって、僕らまだ、ニンジン見せてもらったことないものなあ」

そういう訳で、助教授でも頭を打つことができる。ずっと助教授のまま留め置かれてきた徳田さんの給与を、組合の執行委員になったある弟子が調べてみた。すると、すでに頭を打っていたのである。そこで、この弟子は、そのことを徳田助教授に報告した。ところが、徳田さんは、給与表の仕組みを全然ご存じない。それを理解させるのに苦労したそうである。やっと理解した徳田さんはこう言った。「そうか。僕は助教授として『位、人臣を極めた』んやなあ」

「位、人臣を極める」とは、臣下として、最高の位に上るということである。日本には昔から、万世一系かどうかは怪しいが、いや怪しくはなく万世一系ではないが、天皇というものがいる。これは「人」ではなく、「神」であり、人は天皇にな

れない。人としてなれる最高位は、むかしは太政大臣であった。平ノ清盛が太政大臣になったとき、「位、人臣を極めた」と言われた。それをもじって、徳田さんは、助教授としての頭打ちを、子供のように喜んでいたというわけである。

教授になって権力を手に入れたいとか、単に威張りたいとか、そんなことは思わない人も、給料は高いほうがいいとは思ふ。そこにつけこんでいるのが、この給与表の仕組みである。級が上がらないと、給料も上がらないことになっている。徳田さんはお金などどこからかわいてくるものだと思っていたらしいが、奥さんの苦労はあまりご存じなかったようである。

もっとも、これは、「教育職1」という給与表の中の話である。国家公務員の給与表は、たくさんにわかれていて、一般事務職員は「行政職1」、用務員や警備員は「行政職2」、その他、医者とか、技術職とか、看護婦さんとか、すべて別の給与表が用意されている。「行政職1」の給与は、「教育職1」にくらべて、とんでもなく低い。大学教官は、国家公務員のなかでは結構優遇されているほうである。

10年ほど前、大学教官の給与が、高校教員に追い付かれそうになったことがある。高校教員と大学の助教授が同じ位の給料になったのである。これではいけないというので、文部省は「人材確保法案」というのをつくった。給与が高校教員と同じでは、大学に「人材」がこなくなる、というのがその理由である。

そんなことでこなくなる「人材」など、大学にはいらないと思うが、やはりどうしても、大学・高校・中学・小学の順で、給与は低くなっていかなければならぬらしい。この法律が通ったおかげで、私の給料が上がった。私のみならず、かのF助手の給料さえ上がったのである。「あら、私『人材』だったのね。文部省に『確保』されちゃったわ」というのが、そのときのF助手の言である。

最近、官僚主義の打破が叫ばれ、高級官僚に非難の矢が集中しているが、官僚主義にもなかなかいいところもある。京都に、徳田さんの弟子で、相当な過激派がいるが、60年代後半の大学闘争たけなわの頃であった。東京から、日本大学の精鋭が、京大闘争を応援にきた。彼は、理学部事務室の包囲攻撃を命じた。京大の理学部は、各学科がそれぞれ別の建物に別れていて、その端に小さな理学部事務室の建物がある。ところが、応援部隊は間違っ、そのとなりの植物学教室を攻撃してしまった。慌てた彼は、指令の出し直しをして、事務室を包囲させたのだが、「その包囲された理学部事務室で、いったいどんな会議をしていたか、わかりますか」と、彼は私に笑いながら言った。「何と、ぼくの特別昇給の議論をしたんだそうですよ」そして、つけ加えた。「大学いうたらええとこや。辞められんわ」

それはともかく、このようにして大学教官の給与は結構高いのだが、それでも、裁判官にくらべると、格段に低い。というよりも、裁判官は買収されないように、高い給料があたるようになっているのである。そのことには、別に文句はない。だが、その高い給料に見合う判決を出さないことには文句がある。家永教科書裁判にしても、愛媛の忠魂碑裁判にしても、政府べったりの判決ではないか。給料かえせ!

(追記：10月20日にでた、家永第3次訴訟の東京高裁判決は、やや前進した。もっとも、家永三郎氏はまだ満足せず、上告して戦うそうである。こういう人を、「偉い」人というのである)

これもどこかで、ということは、本誌で、書いたことがあると思うが、私が神戸市にはいったとき、市の職員組合の人がやってきて、組合の運動のことをいろいろ話してくれた。私はその時、初めてこの号級制なるものを知ったのである。彼は、出世しなければ給料が上がらないというこの制度は、職員の労働強化を招くからよくない、いま組合は、「通し号級制」を求めて運動してるのだと言った。通し号級制というのは、すべての給与表を一本にして、しかも、級もなくして、局長も平職員も市電の運ちゃんも(あのころは、神戸市にも市電があったのだ)、同じ年齢なら同じ給料になる、つまり「同一年齢・同一給料」制のことである。こうなると、助手でずっといても頭打ちは起こらず、年寄りの助手は若い教授よりはるかに高い給料をもらうことになり、あくせくと雑用に追い回され、ゴマをすりまくって、出世を求めなくても、悠然と暮せることになる。

今の私なら、その方針に大いに賛成したところだが、当時はまだ若く、「革命」を目指してはりきっていた。だから、「通し号級制」にすら、不満であった。それで、偉い人はいい格好ができるのだから給料は少なくていい。ごみ集めの労働者は人の嫌がることをしているのだから高い給料にする。つまり、今の給与表を逆転して、偉くなるにつれて給与が下がるというのはどうか、と提案した。彼は、ぎょっとしたような顔をして、「君、そんなことしたら革命が起こるよ」彼はその後、二度と私のところには来なかった。

ついでにいうと、京都にある精華大学というところは、教員も事務員もいっしょにして、給与表の一本化をやっているということである。そして、用務員の給与もそれに合わせるべく運動しているのだと、10年ほど前に聞いた。今はもう一本化しているにちがいない。自由の森学園はどうなっているのか、聞いてくるのを忘れた。

それはともかく、徳田助教授は、助教授として「位、人臣を極め」、助教授のまま定年退職を迎えた。

## (5)

その徳田さんが、わざわざ水族館まで私をたづねてきた。何を言いに来たのかとと思ったら、「あのなあ、奥野君。こんべん糖って知ってるか」「そのくらい知ってますよ。とげとげのついた砂糖菓子でしょう」「そうや。鉄でなあ、あんな形のもんつくって、ポケットにいれて持ち歩こう、思てるんや」「そんなもの、つくって、どうするんですか」「車がたくさん走ってるやろ。その前へばらばらっとまくんや」「そんなことしたら、パンクしまっせ」「そうや。面白いやろ」

定年直後だから、当時徳田さんは63~4歳。いい年のおじいさんである。そろそろ街中に車があふれはじめたところで、もちろん運転などできない徳田さんは、被害者意識をつのらせていたらしい。それをこんな形で解消しようというのが、徳田さんらしいのである。

「それで、ほんまにつくったんですか」「それがなあ、息子に相談したら、やめとけ、いうんや」

私は、小学生だった息子と娘をつれて、比叡山へ登ったことを思い出した。ちょうどそのころ、比叡山ドライブウエーなるものができて、私が愛用していた奥比叡の山路が寸断されていた。そして、あちこちになんと「歩道橋」がかけられていたのである。「ここは昔は森の中のええ道やったんやけどなあ」私は息子と娘に話ながら歩道橋を渡っていった。すると、娘がなかなか来ない。しばらく待っているとやってきた。「なにしてたんや」「歩道橋の上から道路へ石投げたった」

この話を徳田さんにした。「息子なんか相談するから、反対されるんですよ。孫に相談しはったら」「そうやな。今度相談してみるわ」その結果は聞かなかった。

そんな話ばかりしていたわけではない。徳田さんは系統分類学が専門だが、系統や進化を考えるには生態学の知識がいるとあって、結構よく勉強されていた。これは、『生態学入門』に書いたことがあるが、私たちが学生のころ、よくやってきて、いろいろと議論をふっかけた。「生態学いうたら、生物の生活を研究するんやろ」「そうですよ」「君ら、まだ自分で金稼いでないし、嫁さんももらってないし、子供育ててるわけやないし、まだ生活してへんやないか。自分が生活しとらんで、なんで生物の生活がわかるんや」

これには困ってしまった。とにかく、私たちが困ることばかりいうのである。また、何か壁にぶつかって、そこから逃げようとしたとき、必ずやってきて、いや味をいう。その辺の感の鋭さは、天才的だった。だから、私たちはいじわる爺さんと呼んでいた。ずっと後に、結婚し就職し子供もできてから、「これで生態学をやる資格ができたでしょう」といったら、ちょうどそのころ、孫が生まれた徳田さんは、「孫ができんとあかんなあ。孫いうたら、可愛いもんやで」私に孫が生まれたころには、徳田さんはもうあの世へいっていた。

そのころ、生態学では生態系理論や個体群生態学が流行っていた。いずれも、生物の歴史を無視した理論である。系統進化学者として見るに耐えなかったらしい。「生態学がゆがんできてるのに、君ら、何もせんのか。批判してちゃんとせなあかんやないか」「そんなこというたって、僕らだけ騒いでも、何ともなりまへんで」「何ともならなんだら、生態学はもうあかん、いうて、幕を引いてしまえ」

ちょうど1970年ころの話である。全国学園闘争がほぼ終息し、公害問題がどっと表面化していた。そして、わが生態学者は、生態系理論をふりかざして、地域的局所的な「公害」にかかづりあっていると地球的規模の環境汚染によって人類

が減びるぞ、とか、個体群生態学の数学を使って、問題の根本は人口の爆発的増加にあるとか、社会へ向かって発言を始めていた。

生態学という学問の中なら、何をとなえてもかまわない。学問は自由である。しかし、世間一般に対してはいい加減なことを言ってはいけない。やくざ同士のケンカなら少々派手にやってもいいが、素人さんに迷惑をかけてはいけないのである。大学や学者の本当の姿をあまりご存じない素人さんは、とんでもないことを言っている、学者の言うことは正しいと誤解することが多いからである。

この時の生態学者の発言は、相当にひどかった。私は、水族館で魚に餌をやっていればいい身分だったから、別に責任をとらなくてもよかったのだが、神戸では一応生態学者として通っていたし、新聞社から意見を聞かれることもあった。だから、少しはなんとかしなければいけないとは考えていた。京都で徳田さんも、同じようなことを思っていたらしい。

そこで、徳田さんにそそのかされて、いくつか生態学批判の論文を書いた。『科学朝日』にも載せたし、『ミチューリン生物学研究』という、ほとんど誰も知らない雑誌にも載せた。そして、いよいよ生態学批判の本を書こうと思って書き始めたのだが、どうしたわけか魚の本になってしまった。まあ、大学から水族館を通して、魚のことばかりやってきたのだから、仕方がない。でも、魚の話だけで終わったら、徳田さんに怒られるから、最後の一章を使って、生態学批判を試みた。それが私の処女作『磯魚の生態学』（創元社、1971）である。

この本を読んだ徳田さんは、わざわざ京都から神戸の水族館までやってきて、「ち前、とんでもない本、書いたなあ。こんなこと書いたら、あちこちから大砲の弾丸が飛んでくるぞ。とぼっちりを受けたら危ないから、もうお前には近づかんことにする」と、ニコニコ笑いながら言う。自分がそそのかしておいて、無責任な先生ではある。

もっとも、大砲の弾丸は、しばらくは飛んでこなかった。ぶつぶつ言ってる生態学者はたくさんいたようだが、面と向かって言ってくる人はいなかった。私はこの後すぐ、金沢大学へ移ったのだが、大砲の弾丸が飛んできたのはその直後だった。伊藤嘉昭という、世界一流をもって任じている生態学者が、中央公論社の出している『自然』という雑誌に、「生態学の危機」という連載を初め、毎回私が登場して叱られることになっていた。どうやら、私が生態学の危機を作り出した張本人ということらしい。こうして、生態学より先に私が危機に瀕してのだが、徳田さんは自分が言ったことを守って、助けには来てくれなかった。まあ、助けてもらうこともなかったのだが。

金沢大学へ移るときも、一度徳田さんに会っている。

「奥野君。金沢へ行ったらなあ、二つのことだけ守れよ。そうせんと、勉強でけんぞ」「はあ？ なんですか」「ひとつはな、部屋に電話つけんことや」「電話つけたらあきませんか」「僕の部屋、電話なかったやろ。廊下の電話の呼び出しや。

ああしといたら、ちょっとした用事で電話かけてくる奴、おらんようになるんや」「なるほど」「もうひとつはな、事務からようけ書類が回ってくるけど、見んと机の上に積み上げておくことや」「そんなことしたら、重要な連絡事項わからんで、困りませんか」「僕は30年ほど、そうやってきたけど、いっぺんも困らなんだで」「そのかわり、事務の人が困ったんとちゃいますか」と言いかけたが、これは言わなかった。「だけど、なんでそんなことするんですか」「大学いうところはなあ、ちょっと事務的才能があるとわかったら、やれ何とか委員会やとか言って、こき使いよるぞ。あいつは能力がないと思わさんと勉強の暇ができんのや」

金沢へ行って、私は部屋に電話もつけ、書類も適当に処理しているが、別の方法で暇は充分とれている。初めの頃に、出された委員会で、言いたい放題発言したら、何時の間にかすべての委員会からしめ出されていた。かくて、私は、筋違いだが恩師である徳田先生の言いつけを守ったことになる。もっとも、できた暇を、勉強にあてたかどうかは聞かないでいただきたい。

(5)

晩年の徳田さんは、変なことばかり言っていた。

「あのな、奥野君。大学におると、精神が腐ってくるで」「なんでですか?」「大学におったら、大学の先生と付き合いなんらんやろ」「そら、そうですね」「そやから、腐ってくるんや」その時はよくわからなかったが、大学生活20年、そろそろ定年が近づいて、当時の徳田さんと同じ位の年頃になった、今の私には、よくわかってきた。そんな状況は、今のほうが格段に進んでいる。

あるとき、彼はアラビア語の勉強を始めた。「そんなもん、勉強して、どうするんですか?」「定年になったら、アラビアへ行って住むんや」「なんでまた、アラビアなんかへ?」「アラビアいうたら、よさそうなところやないか。日本よりだいぶましやで」「そうですかね」だが、徳田さんのアラビア行きは、挫折した。アラビア語が全然上達しなかったからである。「アラビア語いうたら、むつかしいもんやで。まあ、あれだけわからなんたら、腹が立つより、おもしろくなるな」

その少し前までは、静岡県に住むと言っていたのである。「何で静岡県なんですか?」「富士山が見えるやないか」それが進んで、富士の樹海に住むというところまで発展した。一人用のテントに住んで、わなをしかけてネズミを捕って、食べるのだそうである。まあ、私が南洋群島に住むと言いつけしているのと大差はない。

定年の祝賀会では、「私はこれまで、大学教官という、いわばイモムシみたいな生活をつづけてきた。定年を機会に脱皮して、ひらひらと舞うチョウチョになるのだ」と挨拶された。私はつい、「ドクガになったりして・・・」とつぶやいて、叱られた。

まあ、晩年、徳田さんは、大学や大学の先生や、それにおそらく自然科学にも、

つくづく嫌気がさしておられたのだろう。そのすべてが、格好付けでなりたっているものだからである。そんなしがらみからはなれて、本当に自由になりたかったにちがいない。アラビアも富士の樹海もチョウチョも、その象徴的な表現である。

だが、定年後間もなく、脳出血で倒れ、2年間の闘病の後、亡くなられた。自由な生活は、きわめて短かったことになる。

助教授で定年を迎え、その学問は誰も継承せず、一代かぎりに終わった。それは、私の理想でもある。それに加えて、自由な期間がもう少し長ければ、言うことはない。

なに？ そんな理想を求めなくても大丈夫、間違いなく実現する、って。誰だ、そんなこと言う奴は。

お金がキライダ。突然だが、大キライなのだ。ゆるせない。毛虫やネクタイよりもキライなのだ。どうしてこのような、うさんくさい代物が存在しているのでしょうか。これは宇宙人のインボーではなからうかと常日ごろ思うのだ。

だいたい、あのような紙切れに、大丈夫たるもの、なぜにへこへこせねばならぬのだ。ゆるせん。ほんでもって、紙切れをたくさんもったばかどもがえらい人と、自他共にとんでもないかんちがいをしている。もっとゆるせん。そしてこの紙切れを神のごとく、いや、神なき世の全き神なのだが、すーはいしているばかども、死ね。

と、のっけから過激よ過激、農桑よブルトニウムよ長柄川河口せきよ、なのである。ついでに、アホなアホなゴルフ場よ、なのだ。まったくもってゆるせない。イカリにンミソブッチンポコ。これが今の私なのだ。なぜにノミソブッチンホニャラカホーなのかといえ、私のまわりが絵にかいたような、小説に書いたような、はたまたテレビに出てるやつらのような、政治家のような、まさしくばかどもばかだからなのだ。正しいばか道というものからもはずれておる。おろかものじゃあー、うじむし以下じゃ（うじ虫君、すまぬ、悪気はない）

というのは、この私、今なぜか役人をやっている。あの世間から、目くそ、鼻くそ、耳くそ、とうもろこし入りのくそ、にんじんの食いすぎで赤っぼいくそ、のようにいわれておる役人なのだ。これがこれが、聞くと見るのとまったく一緒、ほんとうとうもろこし入りのくそなのだ。そのおどろくべき近視眼、おどろくべき保存性、なにからなにまで万国ビックリショー、オーチンハラショーなのだ。はたしてこの役人の世界システムが、お酒の飲み過ぎでちょっとゆるいかしらん、かなりにおうわね的くそか、それをになう人々が、たまごの食べすぎで固いでごんすよ的くそかといえ、どっちもまげずおとらず、はなはだしいくそなのだよ。でも、どちのくそがはなはだ好ましからずといえ、たまごぐそと結論に達するのだ。あのおろかさかげんは、筆舌につくしがたきものがあるが、あえていえば、その驚異的えばりぶりである。一見やわらかそうなものごしに、残忍なる目つき、「道民たちよ、オレたちはおまえらに金をおとすためにはげんでんだからな」という態度。これはまだかわいい。これは、ばかといえ、ばかといえ、すんでしまうことなのだ。ばかかと言わずにはすまないことが、こえだめの世界から次々と生まれるのだ。そいつはすなわち公共事業なのだが、花とダンゴの世界。この金金金金銀パールプレゼントのためだけに、建て前は住民の生活のために、経済の活性化のためだけに、もっとも富にあふれる世界がコンクリートと無機物の世界になっちゃうのだ。そして、何

も考えない、いや考えるノーマットの無い役人は、無表じょうに自分の割り当てられた仕事だけを（金にたいしてはへらへのーらへーらだよ）たんたんとこなすのだ。こうようやつらの趣味は必ずゴルフであることはいうまでもない。たまにけっこうアウトドアも趣味なんてのもいるが、彼らを見つけたら、湖ひきまわしのうえ、火あぶりにしてよろしい。やつらには野を楽しむ権利などないのだ。

このようなくそ役人とその仕事によって、川はコンクリーの水路、山ははげ、海はゴミダメになっているのだ。それも金のためだけ、おのれのあわれな権力のためだけになるのだ。なにを富とはきちがえること、はなはだしい。最近とてもよく、非常によく、はなはだたっぷり耳にすることは、「昔は・・・だった」「前までは・・・だった」これほど悲しいことばはないぞ。どこへ行ってもこのことばだ。「昔は、この川もたくさん釣れたけどな」これだ、と、イカリマンからカナシミマンになるのである。

今でさえこうだ。わしらの息子たちにいったいなんと言ったらいいんだ、どう説明すればいいんだ。私の息子の代となったなら、なにを見せたらいいんだ。ばかもの、究極のおろかもものたちの作品群、まだまだ増える冷たい作品群をみせろというのか。子供たちに川や魚というものを教えるのは、めくらに色を教えると同じになるだろう。悲しい、なんと悲しい、オーチン悲しい、オーチンオーチン悲しいのだ。こうなるのは、目あるものが色を見るように、耳あるものが音を聞くように、明らかなのだぞ。

何が悪いのか。それゃあ役人どもはたいへん悪い。土建屋も悪い。それをささえる官人や政治家はもっと悪い。だけど、いっちゃん悪いのは、牛乳バック集めて、割りパンは使わないわ、リサイクルしなきゃ、私っていいことしてる、うふっ、なんて言ってる、我々が最悪に悪いんだよ。わかったか、ばーろーめ。善人ぶったケモノども、そろそろ考えろ。手おくれになっちまったけど、これ以上くそみそにする前に、何が富であり、どうゆうことが豊かであるのか、牛乳バック集めて満足してるひまがあったら考えろや。（このことにつき、禁止的には大事ではあるよ、〇〇さん）

私はこのたび、金のためだけに、しぶしぶ、いやいや、やっていた役人をやめる（おのれ、金め。やっぱりゆるせん、の初めにもどってしまった。ついでに言えば、ボーナスまでやめれない。やはり金は大キライだ）

そしてまた旅に出るのだ。だが、以前とちがい、いきどおり49%、悲しみ49%、楽しみ2%の旅でしかないだろう。そしてその旅で、もはや失われることが決まった、わずかに残った最後の富を記ろくすることにする。そして少しの残りの富が失われる姿も記ろくするのだ。それがオレのすべきことだろう。そのレポートは、また本誌にのせるつもりだ。（いらねえ、とは、いわせねえぜえ）

それにしても、人間はどうして進歩しないのだろう。日本人は進歩どころか退化している。文明は、科学技術は、進歩ではない。それは最後の時までわからんのだ

ろうな、きっと。わかってないからこうなった。また、こうなってくんたろうな。  
もう残された時間はわずかだよ。  
《文中、不適切な言葉が、たびたび出てきたことを、著者はお詫びしそくにありませんので、著者に代わってお詫びしますー編集局》

日本生物学会本部 奥野先生

外野一同

' 93.9.28

前略、資料お送り頂きありがとうございました。面白い講義をお聞かせいただいたうえ、このような困った贈り物を頂いて外野一同感謝しております。

さて、滋賀大学におります外野一同ですが、困ったことに奇特な人の集まりでして、よりもよって集団で日本生物学会に入ることにさせていただきました。さらに、同じ入るならという事で本部に寄生する形で支部を結成することに致しました。（同封の通告書を参考にしてください）

困った贈り物を頂いた上、更にこちらから困った返礼をするのもいかがかと思えます。どうかどうぞお受け取り下さい。（会費は上納金として2年分一括して振替で送金いたしました。）

学会の支部報については、現在追加で論文を執筆中です。次号にでも投稿いたします。

内野の3回生が借りた本のことなのですが、本人が気に入ったらしく、まだお返しする気になっていないようです。もし、必要であればとりに来ていただけたらと申しております。

以上、ご連絡まで

事務局長 辻 彰洋

# 通告書

1993年9月17日

金沢市 金沢大学  
日本生物学会会長殿

滋賀県大津市のいなか  
日本生物学会関西支部 支部長 来見 誠二  
発起人  
倉田 真子  
辻 彰洋  
橋屋 誠

我々発起人は今回緊急に会議を開き、勝手に日本生物学会関西支部を設立して、名乗ることとした。ここにその旨を通告する。

なお、通告書を含む全ての文章を学会誌に規約通り掲載することを要求し、支部として今回本年度および来年度の2年分の本部会費を上納する。

## —— 記 ——

設立総会后、緊急に役員会を開き、本支部の活動指針を次のように決定した。

1. 本支部は生物学的な多様性を高めることを目的とする。
2. 本支部は独自の会報を作らず、本部の会報に寄生することにより目的を達する事とする。  
これは、生物学的多様性を高めることを追及する本会の理念と合致する。
3. 付名誉支部長の任務は本支部会員から提起される事案の全てを承認することである。  
ただし、保健衛生管理に関する栄養指導については拒否権を持つ。
4. 支部長はこの会の全ての決定を独断で行なうことが出来る。  
ただし、本支部会員はこの決定に従う必要はない。
5. 会計は会計局長の自由裁量とする。  
会計監査はこの裁量にいちゃもんをつけることが出来る。  
ただし、買収されることも許されることとする。
6. 本支部の結末は基本的に胃袋によるものとする。  
これは胃袋に神経があり胃袋で思考する我々の思想を実現するためである。
7. 本支部はいつ幽霊になってもかまわないものとする。  
本支部は動物研究室における一つの生態系であって、種の進化や環境の変化により生態系が変化するように、この会も変化（発展・衰退）することはありうることである。我々はこの事実を否定しない。  
我々は現時点における生態系（人間関係）の一つの形としてこの支部を設立した。故に本支部がいつ潰れようと我々の知ったことではないし、また永遠に繁栄させようとも思わない。

## 日本生物学会関西支部 旗揚げ!!!

なんと、なんと、日本生物学会に支部が誕生しました。

事の起こりは、滋賀大学の学部の集中講義に奥野先生に来ていただいたこと。そのとき、最も講義（メインの部分では無くて雑談の部分???)にのって積極的に（授業を潰すということも含めて?）参加したのは、先生に「外野」と呼ばれ、「外野は静かにせよ!」と言われていた、院生（院政?）グループでした。

その院生たちがお昼休みに先生と食事をしている時のことでした。日本生物学会の規約の話になり、「会長の独裁」「会計の自由裁量」に興味を抱いた人たちが自分たちの自由にできる会を持ちたいと言いだしたのが事の始まりでした。

時は変わって、晩の話、院生たち（本来、この部屋の住民以外のものが7-8割を占めていますが）の生活は、昼間は不明と言われていますが、よなよな、動物研究室（鈴木研）の実験室に集まっては、雑談（自主ゼミだよ??：倉田談）をしたり、食事の炊き出し（殊賞の実験だよ：同上）をしたり、片手間で?自分の研究をしたりと動きだすのです。炊き出しについても院生の研究素材である湖魚やきのこが出てくるのもおつなものです。（当然の事ながら湖魚の寄生虫や毒きのこの責任は食べた人が負うことは当たり前???)

その意味で、今回の関西支部は、胃袋を中心としたグループなのです。

それでは、執行部の紹介をします。

**付名誉支部長：鈴木 紀雄（以下教称略）**

現在の甘い社会に適応した『**新人類**』と本人は自負している。

主食は角砂糖、副食は甘いぜんざい。まれに「これはほくがもってきたんだ」と、いいながら実験用の（ありさん用）ハチミツを横取りする。体中が砂糖づけになっていて、砂糖が切れると禁断症状が生じてくる。（現在、近所の喫茶店にぜんざいを置いてもらおうとしているという噂も一。）

胃袋を中心としたつながりはあまり無いけれど？、昼間の？実験室のオーナーである。

この混沌とした院生集団の実質的な責任は、生物学的多様性を追及する彼の思想によっている。生物を専攻する学生以外の人間が、夜になると動物実験室を占拠するのも、生態的多様性からくる争いを避けるため、住みわけ理論の実践を院生が行なっているからである。

また、今回日本生物学会関西支部が出来てしまったのも、もとはと言えば彼の過失にある。すなわち、

- 1.院政の恐ろしさに対する注意力が散漫であった。
- 2.不覚にも夜の院政の実態を、把握していなかった。
- 3.よりもよってそのような院生のいる滋賀大学に奥野先生を呼んでしまった。

(これは最も大きな彼の過失である。)

(これは私の思う盡である：本人談)

以上のような事実にかんがみ、われわれはこれまた勝手に彼を付名誉支部長とした。

#### 支部長・珍珠糸綱係（兼任）：来見 誠二

支部長と言えれば院生グループの中で最も舌が良く回り（三枚舌でないか？：奥野会長談）、しゃべることに定向進化した彼をおいて他にはいないだろう。きっと、何十年か何万年か後には（そんなに生きていられない：本人談）舌顎がモット発達するに違いない、と皆に思われている（既に親知らずは生えていない：本人談）。奥野先生の講義が横道に逸れるように質問し、先生に「外野は黙つとれ！」と言わしめたのは、彼を中心としたメンバーだった。

本部は会長がすべての文章を書くそうだが、この支部の支部長は細かなことが嫌いで文章を書かせる（打たせるの間違えである：本人談）権限を持っているとのたまうため、書記局長（辻）が書くことになった。おそらく、彼は話すことに定向進化したゆえに、書くという能力を退化させてしまったのであろう

(手が退化しているのかも知れない：本人談)。

本職は中学校の教師 (昔は滋賀県も余裕があったらしい：本人談) であるが、生徒をしばく (強く撫でると言って欲しい、今は、していないぞ、クビは借金が残っているので困る：本人談) (撫でるのは別にいいんじゃないの？：倉田談) が本職との嗜もある。魚を釣るのが大好きであり、現在もイwanaやアマゴの研究 (趣味？遊び？) をしているが、常に？失敗をしている。「体がだるい」と言うのが習慣で、来見症候群と呼ばれているが (だるい、えらい、しんどの三拍子<トリアスという>そろわないと来見症候群とは認定できない：本人談)、この症候群は現在蔓延中で支部の会員の中でも、何人かにその兆候が見られる。

#### 会計局長・食料加工指導および保健衛生管理長 (兼任)

：倉田 真子

学会の会計は自由裁量だということが分かった途端に、「会計になりたい！」と言ったのが彼女だった。(なってもええよと言っただけだよ -- :本人談)

彼女の楽しみは付名誉支部長の砂糖の摂取量を監視指導することで、付名誉支部長の拒否権が彼女の唯一の不満の材料となっている。(私は付名誉支部長の健康のためと思って……。でもこれがかえって彼のストレスの原因になっていたりして-。：本人談)

現在、彼女は鈴木研究室に集まる人間の餌付けにいそしんでおり、その結果、彼女の研究しているヒメタニシと同様に、夜になると餌を求めて上に上がってくる (鈴木研究室は最上階にある) ようになった。その秘訣は彼女の微妙な餌付けの方法にあるのだ。その方法とは、オペラント条件付けを厳密に応用したもので、報酬を受ける確率もその大きさも不定にした、世に言うギャンブル性のある条件付けを彼女が採用したことにある。この方法は滋賀大の教育心理学教室における中心理論である、ネズミの学習理論を彼女が人間に応用したもの、と見ることが出来る。(ネズミを小中学生の教育に応用するより、この方がましかも知れんなー。あまり言い過ぎると後期の心理の授業を落とされるかも知れないので言え

ないが<十分いっとる>私は1年しかいないので落とされるわけにはいかん：来見談}

{現在、動物研には洗い物幽霊がいない分、餌づけ方法に更に応用をまかせることも

検討中：本人談}

ヒメタニシの場合は最終的に背中 of 殻に瞬間接着剤で糸を付けられ、おいしくもない植物プランクトン (きっとおいしいに違いない：本人談) の中に釣るされるのであるが、人間相手の彼女の餌づけは最終的に何を目的としているのだろうか？空恐ろしいかぎりである。{5Fからつるされるとか？うふふ：本人談}

{関係ないけど最近、辻さんが私のヒメタニシをいじめるの。一番最初につるされる人はこれできまりだな。：本人談} (それを本人も喜んでいたりして：橋屋談) (橋屋さんもつるしましょうか？、つるされるの意味が違うんじゃない??：本人談)

#### 書記局長・会計監査(兼任)：辻 彰洋

現在、自分のしたいと思ったことを、次の瞬間にはやりかけている。最初は温度計(サーミスタ)を作るという自分一人で作れることをしていたが、次第に彼の求めるものは拡大していき、テリトリーの拡大と共に多数の人間が彼の巻ぞえをくらっている。たとえば、4Fの実験室のドラフトの中は完全に彼の手中に落ち今は、骸骨が並んでいるため、指導教官(女性)に恐怖すらあたえている(しかし、今やっていることは全てやり遂げられるのだろうか?) (自分でも良く分かりませんが多分?大丈夫かな?：本人談) (何でもやっサと5Fは奇麗に使ってね：保健衛生管理長談) (左記職権抹消：書記局長) (こういうところで職権乱用してもよいという権利はないのよ!：保健衛生管理長談)

真夜中にブドウ糖の点滴といいながら、砂糖とクリームが飽和状態の珈琲をすすっている。点滴を飲みながら嬉しそうな顔をして”これで一日のカロリーをとるの”とっている彼は、賞味期限切れの食品を食べても生存しているほど丈夫な(にぶいのかも)胃袋を持っている(今日も支部長の研究材料の冷凍のビワマスの尻尾を錆びた鋸で切って保健衛生管理長の期限切れのククレカレーをかけて夕食を済ませてしまった：本人談)。しかし、時々、栄養補給に近所のサテンに

行っている（辻さんには栄養指導の拒否権はないのよ！ わかってる？：保健衛生管理長談）。生物研究室の院生以上に生物に詳しい一面を持っているのは聞くも涙の彼の経歴による。染色・工芸・マリンスポーツなどにも精通しており徹夜の後、6 km離れた地点まで早朝散歩する（これは鍵をなくしたから探しに行ったのよ：倉田談）（わしの車の中から鍵がでてきた：来見談）といった人間ばなれした体力も持ち合わせている。（物を置き忘れてくるという技も持っているよ）

（夜中に黙々とポーと行ったほうがよいかもしれない>と、しかも出るという噂の道を歩いている辻さんを想像するとちょっと寒いな：倉田談）（後期はわしの授業も出えよ：特別出演化学研究室S教授）（こんなやつ2年も付き合いたくないと思っていると考えるのが正しいだろう、私もそうおもわれて早々と可をくれたぞく優ではない>＜本人Sさんが言っとった。どうしてそう思われたかは謎である。：来見談）

現在は琵琶湖の付着性藻類の研究をしようとしているが、釣り客およびヒメタニシの妨害を受けて前に進まない。（ヒメタニシの教育を倉田さんはしっかりとするように。あかるときは責任を取ってもらうから：本人談）（私のヒメタニシはく小さいけど>人を見る目があるのよ！失礼な：倉田談）

現在彼の研究を妨害したヒメタニシはみせしめとして小さなコップに入れられて動物研の流しに放置されている。（許さん！！：倉田談）

#### 宴会・胃袋担当、人間関係中和担当：橋屋 誠

（一説には胃袋担当だけに箸屋との話もある？、

アライグマ-ラスカル-バッファー-橋屋とも言われている）

彼の主食はインスタントラーメン、副食はアルコール。彼が隣の植物研究室において一人で悶々とラーメンを作っているのを見た人は数知れず。現在炭水化物と脂肪分だけで人間が生きていけることを自らの身をもって実験中だ。どのように脂肪がついていくかも見物である。昔、学部生として滋賀大にいたころは、実験用のアルコールを飲んでいただけの噂もあるが、真偽の程は不明である。（事実です：本人談）（インスタントラーメンの袋の数と彼の体重との相関関係

が、私の興味ある所である。近日中に肝臓の切片を作ってみたいなと思っている：来見談）（僕が死んでからにしてね☆☆：本人談）

宴会でのアルコールの量は仲谷氏に借しくも負けるが、日常のアルコール摂取量は誰にも負けないと豪語している。もっとも、最近皆にいじめられたのがこたえたのか、アルコールの摂取量が彼の分解能力を超えたのか、「胃が痛い」と言いだし、とうとう保健衛生管理長の栄養指導をうけるまでに至った。（うふふっ みっちりと指導させていただきます。：保健衛生管理長談）

そのために周りの人間は餌（報酬とも言う）の質および餌の出る確率が上昇するのでまんざらでもなく、橋屋さまさまである。

彼の人の良さは衆目の一致するところで、そのため宴会を始め行事の企画・運営・後片付けを全て担う羽目になってしまっている。このことは彼のストレスを増やす原因になっているが、その事を気遣うほどこの集団は甘くはないのだ。さらに、いつも人知れずぼやきながら隣の植物研究室の掃除や他人の後片付けをしている。

真夜中、廊下にひびきわたる奇妙なガラスの音と、ぼやき声……。5階の住民であれば夜遅く植物研究室において、ひとりでに数百本もの試験管が勝手に（幽霊によって？）（小人の靴屋橋屋じゃないの?!：畑守・倉田声をそろえて）洗われるという話（あたしの試験管じゃないわよ：畑守談）を聞いたことがあるだろう。（俺が分裂するのか!もっともその分の体重はあるが……。：本人談）（ストレス解消それとも趣味?：倉田談）

それらのうちの何百本かは10年近く前から放置されているものらしく、卒業生が出るたびに遺産として増えていったものらしい、中には橋屋氏が学部生の時代に使った試験管もあるということだ。不思議と積み残された試験管にはキノコが生えず、分解しないため残っているのだった。（恐ろしいことよのー：支部長）

動物研究室にもこのような洗い物をする幽霊が欲しいものであるが、残念ながら逆の人間は多くいるものの、そのような幽霊は出現しないのが問題だ。

(保健衛生管理長の指導が最近強化されているので、もしかしたら少しは奇麗になっていくかも知れない。)

また、動物研ならびに植物研における彼の功績の最も偉大な所は、人間関係の調和を保つという裏方(裏技?)を一手に引き受けている所である。彼は部屋人間の気分の変化や種々の行動が大きな火種にならないように常に心配りをしている。そのためバッファーと言う称号が彼に与えられている。(しかし彼は自分の気持ちのケアを忘れかけている:辻談)(火のない所に煙なしといえますからねー:倉田談)(・・・それにしても、私に対しては、かなりまきぞえをくらわしているんじゃない?:畑守談)

#### 節足動物分野 渉外担当: 畑守 有紀

トタテグモのごとく、研究室の扉の前をとおる学生(餌?)を扉の中に引きずり込んでいる。とって食おうというのかどうか不明であるが、どうやら実験の手伝いを「お願い!」と、ねだられているらしい。(しかし、トタテグモのごとく成功率は悪い。:本人談)

ラスカル橋屋と共に、となりの植物研(きのこ部屋とも呼ばれる)の住人だが、去年はなぜか動物研で生活をしていた、しかし、テリトリー争い(実際にあった。次の人との争いはなかなか見物であつたらしい:支部長談)に破れた現在は、植物研から侵略の機会をうかがっている。(そうか?:支部長談)

彼女の研究しているトタテグモに生えるキノコ(クモタケ)は寄主を喰い殺してしまうが、彼女はどうか不明である(おれはどうなるんだ!:橋屋談)。そのためか植物研のオーナーのY先生からは恐れられているらしい。(こんなかわいい私に!ショックだわ:本人談)(ポルターガイスト・ドッペルゲンガーが出ています。私の台詞ではないゾ。Y先生は私の偉大な師です。みんな、実は焼いているわね?!:本人談)

#### 千丈川環境局・555夜間警備(兼任): 有働 正人

もと動物研の住人。今は何を思ったか地理研に行ってしまった。(地理に詳

しくなり滋賀県を影で操ろうという野望を持っているのかも知れない：倉田談)

しかし、今だに動物研に出入りしている。出入りしていると言うよりは、縄張りを守るためマーキング(自分の荷物をおいてなわばりを主張)(ただぼごしているだけという説もある：倉田談)している。「じゃま！」だとか「きれいにしろ！」とか言われてもいっこうに改める様子はない(進化の余地がないのだからか？：橋屋談)。(今になって真面目に水性昆虫の顔覚えしているのがおもしろい。来見談)

頃の25歳になったのである(本人が「けせーバカ」と言っているので一応けしと来ます：支部長)に私より1日お兄ちゃんよ：畑守談)。

#### 農作物収奪委員：臼井 康人

離れ孤島に一人ですんでいるため、さみしいのか思いがけないときに動物研に現われ、いつのまにかコンピュータと一体化し、ゲームのハイスコア保持者として華々しい戦績が残されていたこともあった。学部生当時は断るという手段を持っていなかったため、良き協力者としてみんなの卒論に名を連ねている。現在は自分の意志を(一部)言えるまでに進化したらしい。

現在の彼の研究は、食用菊の細胞培養という極めて有益な内容である。しかし、彼の愛情不足のせい、培養中のプロトプラストは自己爆破をおこせばかりいらしい。(誰か彼にあふれんばかりの愛を与えてあげて下さい。僕は久美子さま<現夫人>がいるから・・・！：来見談)(元夫人、前夫人がいるんですか？：畑守談)(これは私が書いたんではありません。名前を語られると家庭不和の原因に鳴ってしまう：来見談)

#### 書記局長の成績尻拭い担当：仲谷 文貴

酒を飲ませたら、飲みながら分解を始めてしまう酒豪の彼の特技は、鼻からビールを飲むこと(略して鼻ビール)。

彼の現在の生息場所は、生物研究室の者が近寄れない精神的オーラに遮断さ

れたブラックホール。そんな場所に彼は自ら志願して行ってしまったのだ。生存に困難な環境と周りのものに心配されながらも現在ではかなりはばをきかせているらしい。(最近彼の態度がでかい：H女史談) (たのむし、これはS先生の目にふれないように抹消してくれ！：本人談) これも彼の適応能力が優れている証拠であろう。最もそんな彼も胃袋の魔力には勝てず、時たまヒメタニシのごとく5Fに上がってくる。(1FのS先生は、5FのS先生のように不真面目な(墮落した)学生を認めず日夜学生の厚生指導に努力している素晴らしい(?)新進気鋭の大学教官である。まあ仲谷君を見るとまあまあ成功しているとも思えないが：支部長談)

かつてはオサムシおよびオサムシタケを探して火柱ならぬ蚊柱と戦いながら、神社仏閣の森の中を歩いていた(荒らしていたとも言う)。(仲谷君このごろういた話はないようだがどうなっているのかな：臼井談)

《 編 集 局 だ よ り 》

【会長と第6編集局長との会話】（その1）

（今日も6局長は、 長の部屋へ居すわって、コーヒーを飲みながら会長の研究教育？を邪魔している）

6局長：ところで、会長。会長はどうしてこんな生物学会など、つくったんですか。

会 長：その話は、大分前の「生物学会誌」に書いてあるよ。

6局長：何号ですか？

会 長：そんなこと、覚えてるわけ、ないやろ。

6局長：僕はまた、会長って何でも知ってると思ってた。

会 長：だいたい君たちは、覚えとかんなん大事なことと、忘れてもええ大したことのないものの、区別がついとらんや。

6局長：それは、まあ、たしかにそうですけど、でも、会長だって、つまらないこと、結構よく知ってるじゃないですか。空飛ぶ恐龍が、ほんとは飛べなかったとか。

会 長：つまらぬことを知ってるということと、大事なことを知らないということとは、本来関係がないんや。つまらぬことを知ってるからといって、いけないことはなにもない。問題は、大事なことを知ってるかどうか、いうことや。

6局長：大事な事っておもしろくないけど、つまらぬ話はおもしろいからついつい覚えてしまうんですよ。だいたい、会長の講義だって、余談がおもしろいって、学生の評判ですよ。

会 長：あいつら、余談ばかり覚えて、本談のほうはちっとも覚えよらん。本談のほうは、何か言うとか。

6局長：さあ、本談のことは、誰からも聞いたことないですね。

会 長：まあ、こっちも、だんだん年齢とってきて、余談の占める率が高くなってきてることは事実やな。

6局長：そしたら、会長の講義、ますますおもしろくなってきている訳ですね。もう一度聞きにいこうかな。

会 長：講義、聞かんでも、こうして毎日、余談を聞いているやないか。

6局長：そう言えばそうですね。でも、何だか本談抜き余談だけ、という感じですね。本談があって、余談があるのでしょうか。

長：『生物学会誌』でいちばん人気があるのが「編集後記」でな。「編集後記」特集号を作ったらどうや、という人もいてな。

6局長：1ページ目から「編集後記」が出てくるんですか。そんなの、おかしいですよ。「後記」にならないじゃないですか。

会 長：「後記」が最初に出てきたらおかしいなどと考えるのは、君の考え方が固定化している証拠や。どうしてもいかんというんやったら、編集「前記」にしたらええ。

6 局長：編集前記？ そんなもの、聞いたことないですよ。

会 長：なかったら、新しく創ればいいんや。新しく創ることを、創造とかオリジナリティとか言って、科学者たるものは持ってないかんことになってる。

6 局長：ぼく、科学者になるの、もうあきらめましたから、いいんです。そんなもの、持ってなくても。

会 長：なんや、もうあきらめたんか。早いな。

6 局長：ぼくには科学者になる素質などないなあと、大分前から思っていたんですけどね。ほんとにあきらめたのは、会長の部屋へ出入りするようになってからですよ。

会 長：ああはなりたくない、と思ったのやろ。

6 局長：いえ、違いますよ。会長みたいになりたくないと思ったんじゃないや。会長がいろんな科学者の話、してくれたでしょう。そんな科学者にはなりたくないと思ったんです。それに、そこらでそんな「科学者」、たくさん見えますしね。

会 長：それなら、おれは科学者やない、いうことになるやないか。

6 局長：そうかな・・・そうですね、そうなりますね。

会 長：変なところで、同意するな。おれみたいになりたかったら、今みたいなことしてたらだめやで。もっと勉強せんと。

6 局長：会長みたいになりたい、なんか言ってませんよ。「会長みたいになりたくないとは思っていない」と言ったんです。

会 長：ややこしいこと、言うな。わからんようになるやないか。

6 局長：うっかりそんなこと言ったら、すぐ、では、二代目会長になれ、って言うでしょう。

会 長：君も大分用心深くなってきたな。だけど、君は、生物学会の会長より、生態学会の会長のほうが、エライと思ってるんやろ。

6 局長：エラクないんですか。

会 長：生物学会の会長と、生態学会の会長は、本質的に違うんや。どこが違うか、わかるか？

6 局長：違うということはわかりますけど、どこが本質的にちがうか、と言われても・・・。

会 長：だから、君らは、ものの本質を理解できんのや。

6 局長：どこが違うんですか？

会 長：生態学会の会長は、選挙で選ばれるやろ。生物学会の会長は、おれがなる、いうて決まるんや。つまり、みんなに決めてもらうか、自分で決めるか、

というところが、本質的に違うところや。

6 局長：それなら、やっぱり、みんなに選挙で選ばれるほうが、エライみたいですね。みんながエラさを認めるわけでしょう。自分だけがエライと思うのは、自己満足じゃないですか。

会 長：君は、自分がエライとかアカンとか、自分では決めへんのか。他の人に決めてもらうんか。

6 局長：・・・え？

会 長：誰かが、お前はエライ、と言うたら、ああ、おれはエライのか、誰かが、お前はアカン、言うたら、ああ、おれはアカンのか、と思うのか、君は。

6 局長：・・・（ぐっとつまる）

会 長：自分がエライかアカンかくらい、自分で決めたらどうや。

6 局長：そんなこと、なかなか決められませんよ。自分がエライかどうかなんて。と言っても、他人に決めてもらうのも、いやだなあ。

会 長：君らは、小学校以来、エライかアカンか、先生に決めてもらって来たんやろ。そやから、自分で決める習慣がついてないんや。自分で決めたら、自己満足してたらあかん、言うて、脅迫されるしな。自己満足いうたら、大事なことなんやで。ああ、おれは満足した、言うて死ねたら、最高やないか。カンボジアで撃ち殺されて、天皇や政府や警察庁長官から、いくら「お前は偉かった」と言うてもらっても、迷わず成仏できんやろ。

6 局長：それは確かにそうですけど。それと、学会の会長の選挙とは、ちょっと違うのじゃないですか。

会 長：他人の評価という点では一緒や。

6 局長：そんなら会長は、他人の評価はまったく無視するんですか。

会 長：その「他人」によるな。学部長や教授に評価されたりしたら、ぞっとするやないか。おれ、どこか間違ってたんやないか、思って。

6 局長：F先生に評価されたら、うれしいんでしょう。

会 長：素直にはよろこべんな。あの人に誉められたら、仕事が増える恐れがあつてな。学部長にかみつきにいかんならんとか。

6 局長：（クスクス笑う）

会 長：というても、何でも自分で勝手に決めればいいというものでもないんやで。たとえば、自分で会長になって、日本生物学会をつくるやろ。誰も会員にならなったら、もともと成立せんものな。それでも一人で、おれは会長や、いうて威張ってたら、それこそ君の言ってる、悪い意味での「自己満足」になってしまう。

6 局長：そんな時はどうするんですか？

会 長：おれは会長の器（うつわ）でなかった、いうて、反省してやめたらいいんや。

6 局長：会長の話聞いてたら、どんなことでも簡単にできるような気がしてきますね。

会 長：人間本来自由やから、何やってもいいんや。人、殺したらいかんけどな。ただし、何かしようと思ったら、大変は大変やで。生物学会の会長でも、うっかりこんなもの始めたばかりに、一人で原稿書いて、ワープロ打って、印刷して、製本して、発送せんならんことになって。結構エライ仕事やで。

6 局長：わかりました！ 仕事がエライから、生物学会の会長は生態学会の会長より、エライのですね。

会 長：（憔悴たる表情になる）まあ、そういうことに、しておこうか。

### 【会長と第6編集局長との会話】（その2）

（新たに設立された、滋賀県支部から送られてきた原稿を見ながら）

6 局長：滋賀大学にも、変な人がたくさんいるんですね。

会 長：あそこにはな、鈴木君と言って、ぼくの3、4年後輩の教授がいてな。変やなしに、エライ人なんやで。

6 局長：仕事がエライんですか。

会 長：仕事もエライけど、人物もエライんや。

6 局長：でも、その人、教授なんでしょう。会長、いつも言うてるやないですか。学者も教授になったら駄目になる。駄目にならんと教授にはなれん、って。

会 長：何事にも例外というのがあるんや。彼は、教授になってもエライ第2号や。

6 局長：第2号ということは、第1号があるんですか。

会 長：第1号は、化学科のS教授や。教授になっても、全然変らん、珍しい人や。

6 局長：ああ、あの、この部屋へも時々こられる、甲高い声出す人ですか。

会 長：Sさんの甲高い声は有名でな。S教授の講義は、教室のどこにいても聞こえるから、出席せんでも単位がでる、いう評判らしいで。

6 局長：生物にもそんな先生、いないかなあ。

会 長：Fさんの笑い声というのがあってなあ。城内キャンパスにいたころ、大手門入ったらすぐ、Fさんがいるかいらないか、わかるという評判が立った。

6 局長：でも、単位は出ないんでしょう、その笑い声聞いても。

会 長：あたり前やないか。

6 局長：なんだ、つまらない。

会 長：君らはそうかもしれんが、我々にとっては大事なことなんやで、Fさんがいるかいらないかということは。

6 局長：どうしてですか。

会 長：Fさんがいたら、エリを正して登校せんならんからな。

6 局長：まあ、先生はエリでもなんでも正して登校してもらっても結構ですけど、

こっちの投稿のほうですけどね。この「外野一同」というのは何ですか？

会 長：それを話し始めると、長くなるで。くわしく話せば、この号は「編集後記」特集号になりそうや。

6 局長：それをなんとか、手短かに。(小声で独白) 年齢取ると、話が長くなって困る。

会 長：なんか言ったか。

6 局長：いえ、なにも。

会 長：話は、この7月、ぼくが滋賀大学へ呼ばれて、特別講義をしたことから始まる。

6 局長：先生を特別講義に呼ぶ大学があったんですか！ 知らなかったなあ。

会 長：だいたい君らは、ぼくの真価を知らなさすぎる。水戸の茨城大学へも講義に行ったことあるんやぞ。

6 局長：いつごろの話ですか。

会 長：もう10年前くらいになるかな。そう言えば、それっきり呼んでくねんなあ。

6 局長：やっぱり。

会 長：茨城大学は一回きりやったけど、滋賀大学はこれで二回目や。

6 局長：滋賀大の人は、見る目がないんですね。一回で懲りないなんて。

会 長：見る目があるんや。その、エライ鈴木教授にな。

6 局長：そう言えば、「よりもよってそのような院生のいる滋賀大学に奥野先生を呼んでしまった」のが、鈴木教授の「最大の過失」だと、書いてありましたね。

会 長：あのな。おれがせっかく、短くまとめて話そうと思っているのに、お前がいらんこと言うから、話が長くなるんやないか。誰かが年齢取らてるからやないぞ。

6 局長：(小声で) 聞こえていたのか。耳はまたたしからしいな。

会 長：いいから、黙って聞け。

6 局長：はい。わかりました。

会 長：というわけで、買ったばかりの新車を飛ばして、滋賀大学へ行ったと思え。

6 局長：・・・。

会 長：返事くらいしろよ。話しくいやないか。

6 局長：ハイ。

会 長：そしたら、受講者がなんと三人しかいなかった。

6 局長：たった三人ですか。人気ないんですねえ。

会 長：まあな。そやけど、その三人がみんな可愛い女子学生でな。

6 局長：やった！ ついていけばよかった。

会 長：鈴木先生に頼んで、クーラーの効いた小さな部屋を用意してもらって、勇

躍講義に出かけたと思え。

6局長：ハイ。

会 長：そしたら、その三人のほかにも、5、6人、可愛くないのがやってきてな。聞いてみたら、院生やら、卒業した中学校の先生が内地留学で来てる奴やら、会社に就職して三日目にクビになった奴やら、そんなのがたむろしててな。それがまた、うるさいこと。おれが一言いうたら、十言くらい質問してきよる。講義にならんや。

6局長：その可愛い正規の女子学生は、どうしてたんですか。

会 長：先輩に圧倒されて、鳴かず飛ばずや。

6局長：かわいそうに。

会 長：それでな。正規の女子学生を「内野」、やじ馬を「外野」ということにして、あまりにうるさいときは、「外野はだまれっ！」とどなることにしたんや。

6局長：おとなしくなりましたか。

会 長：そんなことくらいで、恐れ入るような奴らやない。とうとう最後まで、講義してるんやら、ケンカしてるんやら、わからんうちにすんでしまった。

6局長：それじゃ、「内野」の女子学生、気の毒やないですか。

会 長：それがそうでもなかったらしいで。そんなこと、初めてやったとみえて、結構よろこんでいたらしい。

6局長：そういえば、会長の本を借りて返さないという話を書いてありましたね。

会 長：そうや。返してほしかったら滋賀まで取りに来てくれとかなんとか。おれを何と心得とるんやろ。

6局長：その学生は内野でしょう。可愛い女の子だったら、車飛ばして来てくれると、思ってるのと違いますか。

会 長：誰が行ってやるもんか。

6局長：ところで、いったい何の本、貸したんですか。

会 長：何やったかな。忘れたな。

6局長：なんだ。それじゃ、上げたようなものじゃないですか。

会 長：そんなことはない。本の名前は忘れたけど、貸したことは覚えている。必ず取り立てるから、覚悟しておけ。

6局長：そんなこと、ぼくに言っても仕方ないですよ。

会 長：仕方ないことはない。君との会話はいずれ「編集後記」として、生物学会誌の紙面を飾ることになるから、いずれは彼女の目にふれることになってる。彼女が直接読まなくても、向こうには、口から生まれてきたような「外野」がたくさんいるから、必ず彼女の耳にははいるはずや。

6局長：会長の本が返ってきても返ってこなくても、ぼくは関係ないからいいんですけど、この投稿は、なかなかしゃれてますねえ。大きい字や小さい字や、

斜めの字や変形の字や、いろいろ使っていて。生物学会誌はずっと、活字一定でおもしろくなかったけど。

会 長：君は、上品ということ知らんな。生物学会誌は、形式やなくて内容で勝負するんや。字体とかレイアウトに凝ると、中身が薄くなる。だいたい下品やしなあ。

6局長：それじゃ、この原稿、また会長がワープロ打ち直すんですか。

会 長：一読してその元気がなくなった。滋賀大学の連中がいかにか下品かを、全会員に知らせるために、これはそのまま載せよう。

6局長：下品かどうか知りませんが、会費2年分前納してますよ。なかなか立派じゃないですか、この不景気の世の中に。

会 長：一見そう思うやろ。ところがな、振り込まれてきたのは、たったの1400円やで。100円×7人×2年=1400円や。それで、生物学会誌のバックナンバー33冊×7=231冊、宅配便で送られたんやぞ。

6局長：・・・（あきれて話は終わる）

日本生物学会誌 第34号  
編集・発行 日本生物学会  
金沢市角間町  
金沢大学理学部生物学教室  
223号室  
編集無責任者 奥野良之助  
振替 金沢 40763 日本生物学会  
許可無断転載